

## 第16回「防潮堤を勉強する会」議事録（未定稿）

日時：2013年9月3日（火） 17時00分から19時30分

場所：気仙沼ワシントン大ホール

主催：内湾まちづくり協議会、オブザーバー「防潮堤を勉強する会」

司会進行：佐々木守、菅原昭彦

### 1. 開会 佐々木守

本日はお忙しい中ご出席いただきありがとうございます。ただいまより、内湾地区復興まちづくり協議会、気仙沼内湾地区の防潮堤整備に関する意見交換会を始めたいと開催いたします。始めに内湾地区復興まちづくり協議会、菅原会長よりご挨拶を申し上げます。

### 2. 挨拶(1) 主催者：内湾地区復興まちづくり協議会 会長：菅原昭彦

みなさん、こんにちは。今日はこんなに多数の方にお集まりいただき、県の方も市の方もたくさんいらっしゃって、また協議会のみなさん、そして防潮堤を勉強する会のみなさん、大勢集まっていたことに驚いておりますし、ある意味感謝も申し上げたいと思っています。内湾のまちづくり協議会の会長を務めております、菅原です。宜しく願いたします。本日は村井知事、菅原市長におかれましては、議会中で大変お忙しい中、このような機会を作っていただきまして、誠にありがとうございます。先月6日に行われました意見交換会におきまして、知事が再度気仙沼に来て話し合いの場を設けると約束していただき、今日の間があることを認識しております。内湾まちづくり協議会は昨年6月に発足以来、被災した気仙沼の顔とも言われる、内湾地区の復興まちづくりに関して、気仙沼市都市計画課を事務局に、コーディネーターや専門家の協力を得ながら、各地区会を中心にワーキング、運営会、分科会を設置し、今日まで協議を続けている会であります。今日参加のみなさんはワーキング幹事会の構成メンバーのみなさんでもあります。私たちの望みは、安全で快適で、気仙沼らしさを失わず、そして暮らしの成り立つまちづくりを、納得できる形で、しかもスピード感をもって進めていくことでもあります。前回は、お互いの主張がかみ合わず、主張し合うことに終始した感じがありましたが、復興事業、復興予算の矛盾、行政と住民の論理の違いを乗り越えて一緒に前に進むきっかけ、課題解決に向けてのプロセス、道筋が見えてくる会になることを希望しております。今回は、前回も臼井会頭も申し上げましたが、改めてぜひ知事の柔軟な判断力と市民感情に寄り添うという姿勢で、県が専門家として、住民ができるだけ納得するものをどんどん出すから、被災した県民のみなさんは色々大変だろうけど、一生懸命一緒に検討してほしい、という態度を示していただくことを願っております。尚、前回のいきさつ上、防潮堤を勉強する会の発起人会のみなさんには、本日オブザーバーとしてご参加いただいております。マスコミのみなさんも、同席されていることをご了承いただきたい。本日はどうぞ宜しくお願い申し上げます。

げます。

## 2. 挨拶(2) 宮城県知事：村井嘉浩

みなさん、こんにちは今日はお疲れのところ、このような時間帯に大勢のみなさんにお集まりいただきまして、心より感謝申し上げます。早いもので、間もなくあの震災から2年と半年を迎えようとしています。改めて、亡くなられた皆様のご冥福をお祈りして、心よりお見舞いしたいと思います。みなさんにとりまして、私にとりまして、最大の課題、最優先にやらなければいけないことは、やはり生活再建であります。そのためにも、住まい、どこにみなさんが今後しっかり住んでいくのか、安心して住める、そういったまちづくりをみなさんと、そして気仙沼市さんと県と一緒に考えていかなければならない、という思いで今日はやってまいりました。現在計画しております防潮堤は、比較的発生頻度の高い津波から、将来にわたり県民の生命、財産を守る重要な基盤施設であります。復興まちづくりを推進する上でも、その前提となる施設でありますことから、その重要性について地域のみなさまのご理解をいただくということは非常に重要だということと考えております。まちづくりをするためには、一定の安全性を確保しなければ復興予算が使えないということ、これは前回もお話しした通りでございますので、まちづくりをする上で安全性を確保するという、そういう視点から防潮堤が必要だということをもつてご理解いただきたいと思っております。これまで県としては、気仙沼市のご協力を得ながら、内湾地区の防潮堤整備について意見交換会や説明会を何度も行ってまいりました。残念ながら、内湾地区では住民の皆様のご理解が得られていない状況でございます。このため、先月6日に続きまして、内湾地区まちづくり協議会の皆様と意見交換を行いたいということで、今日やってまいりました。本日は、内湾地区の防潮堤に関しまして、気仙沼市の提案に対する私の考え方を説明した上で、気仙沼市のまちづくりに関する考え方などをお聞きし、さらに皆様と意見交換を行って、より良い方法を生み出したいと思っております。事業実施を考えた場合、国が支援をしてくれる期限や事業内容等の制約などもございますので、こうしたことも踏まえた上で、皆様とよく話し合いをして決めていかなければなりません。住民の皆様のご理解とご協力をぜひお願いをしたいと思っております。先日、商工会議所のお招きでこちらに来た際に、防潮堤を勉強する会の質問に対して、お盆過ぎにお答えをすると申しあげました。この件につきましては、過日文書でお答えしました。今皆様もお手元に配られているかと思っております。また、追加の質問もあったようですが、これにつきましては、まだ時間が浅いものですので、回答は間に合っておりません。改めて文書、またメール等にて回答させていただきたいと思っております。本日は内湾地区に集中した意見交換会をしたいと思っておりますので、どうか宜しくお願い申し上げます。

## 2. 挨拶(3) 気仙沼市長：菅原茂

皆様おぼんでございます。今日は9月定例議会の開会日ということで、開会をしてからこ

ちらに来ました。ありがとうございます。内湾地区のまちづくり協議会の皆様、これまで地区会や各部会におきまして、ものすごい回数討論を続けてきていただきありがとうございます。今日は防潮堤を勉強する会の関係者の皆様のご参加も心より感謝申し上げたいと思います。8月6日には商工会議所主催で、防潮堤を勉強する会の皆様も集まって、知事と忌憚のない意見交換をしていただいたと聞いております。その懇談を通じまして、知事には気仙沼市の皆様の海との関わりだとか内湾に対する思いだとか、伝わったのではないかなと推察しております。元より気仙沼市は海が頼りの町であります。そのことを前提に、市民だけではなく私たち観光も標榜しておりますから、来訪者も安全でかつ気仙沼らしい町というものを作っていかなければと思います。そのことにつきまして、私たちはこれから県の理解のもとしっかりと役目を果たして、市民の皆様と一緒にまちづくりを進めてまいりたいと思います。今日はできれば1歩でも2歩でも進めばいいなと思います。市にとりましても、私たちにとりましても、参加の皆様にとりましても少しずつでも実りのある会にしたいと願ってご挨拶にかえさせていただきます。今日は宜しく願い申し上げます。

司会：本日の資料確認。次第、県からの回答、気仙沼市における海岸堤防高について、以上の3部。ここからは菅原会長に進行をお願いする。

### 3. 内容 (1) 気仙沼内湾地区の防潮堤整備について<県説明>

参考資料：パワーポイント

菅原：ここからは私が進行させていただく。知事の挨拶でも触れていたが、防潮堤を勉強する会からの質問書については、前回8月31日にも渡した方もいると思う。その時に欠席された方のために本日も用意した。今日これがメインのテーマではないということを理解していただきたい。その中で、3つの再質問をしている。内容を知らない方もいると思うので、その点だけ触れたい。

1つ目は、各浜での説明会、各地区の説明会の参加人数、その集落の元々住んでいる方と、説明会に参加した方々、それぞれの人数を把握できている範囲で教えていただきたい。

2つ目は、県が現在提示している各浜の現状案について教えてもらいたい。

3つ目は、津波シミュレーションから基本計画というものが作られている中で、気仙沼の対象地震が明治三陸となっている。このことに対して、一方で松島はチリ地震、石巻海岸は高潮になっているということがあるので、それはどういう違いからくるものか教えてもらいたい。

以上の3点を再質問している。県の方から回答が来次第、皆様には報告したい。質問書及び回答書に関して、補足をさせていただいた。それでは内容に入らせていただく。気仙沼内湾地区の防潮堤整備について、まずは知事の方から説明をいただきたい。

村井知事：少し時間をいただいて私から説明したい。私が今から話すのは、気仙沼市から

現に提案されていた内容とそれに対する私の考えである。

(資料1) これは先月私が来て説明したものである。堤防を薄い青紫の箇所で作るといったことだった。岸壁に沿った防潮堤配置を基本として考えているが、青線で示した南町付近は 防潮堤より海側の土地利用も考慮して、できるだけ陸側に配置し盛り土や緑化による利便性の向上や景観にも配慮した計画となっている。後ろにあるまちづくりは今私どもが承知している気仙沼市のまちづくりの絵である。後ろの絵は気仙沼市が描いたものである。なぜこのような計画、防潮堤にしたかという、気仙沼市は後の赤い箇所は災害危険区域だという形にしている。つまり、危険な地域なのでここには住めないという方に対しては、国の予算を使って外に出ていくようにした。しかし、ここに今後も住み続けたいという方も住めるようにする、土地区画整理事業も中に入れて、不安だからどうしても外に出ていきたいという人は国のお金を使って出ていく。中にいる方はそのまま住み続けられるようなまちづくりをしたいという、他の地区にはない気仙沼独自のオリジナルな考え方でまちづくりを考えているということである。そのまちづくりをするためには、移転する費用を国にもってもらって、土地の中を整備するにも国のお金を使うためには、復興予算を使わないといけない。通常のみちづくりと違って復興予算は100%国のお金でできるということ。こういったような事業メニューは過去にない。これからもおそろくないと思う。特例である。これを国の復興予算のない中でするなら、莫大なお金を気仙沼市あるいは皆様が払っていただかなければならない。復興予算の中でこれをやっていきたい。そのためには、復興予算を使う前提として、L1津波が来た時にこの町が最低限守れるような防潮堤を作るということがルールとなっている。防潮堤は作らないけど、背後のみちづくりはやりますというのは絶対に認められない。そこで我々が国と協議をして色々な基準をきっちり作った上で、このような計画を作ったということである。先般、それらの説明を何度もさせていただいた。終わった後、色々な方と意見交換させていただく中で、私は少し誤解を与えたと反省している点がある。この案しかない、この案以外は一切県としては認められないので、皆様呑み込んでくれ、納得してくれというような形に聞こえたという意見が多数寄せられた。決して私の方はこの案でなければならないということではなく、やはりL1の堤防が高すぎるということであればそれを少しでも、何mも下げるとするのは難しいかもしれないが、堤防の作り方を工夫することによって、作る位置や作り方を変えることによって少しでも下げられるような努力はしたいと考えている。しかし、今のところは我々が色々検討した結果、これがベストだと考えてきたので、ぜひこの考え方をベースに、皆様と知恵を出し合って何らかの形でアイデアがあれば、そのアイデアを入れながら、工夫をしていきたいと考えている。そういう意味では、表現が少し誤っていたということで反省をしている。決して、何が何でもこの高さでこの場所であるということではない。ただし、かなり厳しい制約があるので、何でもかんでも自由勝手ままにはできないということと、すでに湾奥部以外のところは進んでいるので、他の地域に対する影響というものを考えなければならない。元に話を戻すと、この案に対して気仙沼市から3

つ提案があった。1つは、南町のウォーターフロントを拡大すること、2つ目は、南町は避難訓練、避難道路、施設を整備することで防潮堤を山づけにして無堤化する、堤防を作らない、この堤防を作らないで山を利用して無堤化してほしいということ、3つ目は、内湾地区の余裕高をやめて、特殊計画堤防高、マイナス1mを提供すること、つまり、堤防の上に我々は1mの余裕高というのを設けているが、それをなくしてくれというのが気仙沼市の要望であった。そこで我々も1か月かけて検討した。まず、南町のウォーターフロントの拡大については、このようになる。(資料参照)赤線で示したように、当初案に比べて、約20mの防潮堤の位置を陸側へセットバックすることによって、より広いウォーターフロントを確保したということである。これについては、気仙沼市のまちづくり計画にあるように配置することは可能であるので、実現できるであろうと判断している。次に南町の無堤化、堤防を作らないということについて、南町の防潮堤を山づけにすることにして無堤の区間を作ると、この場合津波に対する防護ができなくなるために、その土地利用をどのように考えるかということが極めて重要になってくる。県としては、防潮堤の海側への設置が可能な施設は漁港施設や港湾施設であることが基本である。それ以外の施設については無堤区間に設置することは好ましくないと考えている。この地区に限らず、県内の同じようなところ全て堤防の内側に入っただけのようにしている。しかし、地域としての設置の必要性や安全確保のための条件等を整理して、ある程度施設を限定することができたならば、この案も実現可能である可能性があるのではないかと考えている。気仙沼市のまちづくり計画や、津波避難計画との調整を図りながらさらに検討していきたい。ここに色々と施設があるので、この施設の皆様にまず守れませんよという理解をいただき、避難路をしっかりと確保していただくといったようなことを気仙沼市とよく話をさせていただいて、理解をいただくこと、避難路をしっかりと作るということである。最後に、余裕高1mをとらない特殊計画堤防高の適用について、これまでのシミュレーション結果では内湾地区は津波が増幅傾向にあることから余裕高は必要であると判断している。また、余裕高をとらなかった場合にはL2津波の浸水域が広がる可能性もあり、まちづくり計画にも影響を与えるために、その確保は絶対に必要だと考えている。ここはなかなか譲れない。県としては、気仙沼市の提案についてもできるだけ実現できるよう努力していきたいと考えている。今後、本日説明した防潮堤案での津波シミュレーションを行って、津波高を再確認しながら、実現の可能性について検討を進めて、地域の皆様と話し合いながら納得できる防潮堤の計画としていきたいと考えている。少しずつ変えてシミュレーションを色々な形で行うという意見もあるが、シミュレーションをかけるのはここだけでなく、当然ここをいじると気仙沼湾全体に色々な影響が出てくるので、ここのシミュレーションだけをかけてというのは不可能であるから、この地域全体のシミュレーションをかける。したがって、相当お金がかかるので、少しずつ何回も何回もということとはできない。できれば、こういったことをベースに皆様と気仙沼市と一緒にいって共に知恵を出し合って、話を詰めていくというのが望ましい。その上で、2案、3案、4案、これくらいでちょっとシミ

ュレーションをかけてくれ、これくらいであれば我々も納得できるというところまで行って、シミュレーションをかけてこれが一番ベストであるということは可能であるが、やはり貴重な財源を使う以上は手当り次第シミュレーションをかけるというのは難しい。ぜひ理解してもらいたい。我々としては、この1か月間でできるだけ譲れるところは譲ろうということで話し合いをしてきた。もちろん内湾地区だけ特別に無堤化することはできないので、このように変更することによって県内の他の地域も同じような問題が発生してくるということになる。しかし、皆様より強い要望があったのでこれについてはぜひ前向きに検討していきたい、その分全体の指針、防潮堤設置の指針というものを変更するという柔軟な対応で臨みたいということである。

県ではこのように考えている。気仙沼市ではこの配置を踏まえたまちづくりというものをどう考えているのかということをも市長の方から話をいただきたい。

菅原市長：具体的な話と、市からの提案した案に対しての検討状況を示していただきありがとうございます。当市の基本的なスタンスとしては、平成23年の9月に県から防潮堤の高さを示され、その基となるのは中央防災会議の考え方であるが、その後については基本的にL1L2という津波を踏まえたうえで、市民の生命と、産業基盤を含む社会基盤、市民の財産を守るということで考えてきた。一方で平成23年の9月に示された堤防の高さというのは、特に岩手県と違い、宮城県、気仙沼市、さらには内湾地区においては防潮堤がなかったということもあり、非常に受け入れがたい壁の高さである。その時に私たちが思ったことは、まずは港があって初めて防潮堤があるので、港の機能や、内湾にはあまり関係ないかもしれないが、磯辺の資源、海水浴場との砂浜、さらには全体を通しての景観を守るということをしなくてはいけない。そういうためには、高さとして非常に受け入れがたいということ、守らなくてはいけないことが幾つもあるということ、基本的な考え方は受け入れたうえでも、運用面では原則を守りながら最大限の柔軟性がなければ、なかなか市民の皆様の合意を得ることは無理だろうと感じてきた。そのことはこれまでも何度も県の当局の方には話をしてきた。本日はそのことも踏まえて、具体的な対応を示されたということで、そこからまたスタートしていきたい、大変ありがたいと思っている。まず、南町のセットバックのことであるが、セットバックというより、ウォーターフロントを広くできるかということである。交通量を確実に確保することをキープした上で、なるべくウォーターフロントを広くしていかなければいけない、ということがポイントではないかと思う。先般、私も八戸に行って、館鼻岸壁という毎週3百何十点の朝市が出ているところであるが、その所を見てきた。この機会に、何十年、百年ということを考えれば、ウォーターフロントを広くする、ただ一方で町があるので限度もあると思う。南町の堤防を下げるということはイコール山づきを港町からしていくということ、どのところでくっつけるかということと非常に絡んでくるので、ここは地域の皆様の意見を聞きながらウォーターフロント拡大への意見をさらにいただき、かつその使い方というのを含めて話し合っ

いきたい。シミュレーションをかけてもらうためにはラインを決めなくてははいけない。港町については、ずっと県当局と私たちと堤外に何があっても良いのかということに関して、細かい点までは喧々諤々でやってきたが、当然のことながらここを無堤化するというためにはそれなりの備えが必要で、そのために避難計画や、付近の皆様の了解、避難路が必要。避難路は復興交付事業の効果促進事業のメニューにも謳われているので、何とかできると思っている。その辺をしっかりと、来訪者も含めて守ることを念頭に、私たちも詰めていきたい。そういう意味で、先ほど高さについて今の所はなかなかこれではできないとの話であったが、まずは今のシミュレーションは、岸壁にずっと沿って堤防があるということでシミュレーションがかかっているの、これが今港町の方がなくなって、南町も少し下がって、南町から港町の方へ直線で壁を作る、つまり内湾の受けが少し広がるという形でのシミュレーションができることになる。そのことによって、今出ている4.2m+1mの、4.2という数字ができるならば下の方に動いてくれないかと強く期待している。ただ、4.2が少し下に動いたくらいでなかなか内湾の私たちが求める姿になるかどうか、皆様の納得がいくかどうかという問題もあるので、今当市の方では都市計画課の方で、地盤高に関してはこの協議会で何度も話が出たが、南町側の方は既存の建物があって連担もしているというところで、TP+1.8mまでも盛りづらいことがベースになっている。一方、魚町の方は1.8まで盛るとなっているが、その1.8でなくてははいけないのか、もう少し地盤を上げるということができないのか、つまり魚町側に関して言えば、TP+1.8mを上げる努力をどこまでできるのか、そのためには色々なことが出てくる。排水の処理など別なお金がかかってくるが、それも含めてどこまでできるのかということ徹底追及していきたい。そのことと、先ほど言った4.2と防潮堤の形を変えること、内湾の受けを広くすることによって4.2をどこまで下げられるか合わせてやることによって、何とか内湾の良さを生かしながら皆様の合意も得られないかと考えている。したがって、南町のラインをどのようにするか、港町のどこにくっつけるか、仮で良いので決めていただきたいと思う。何度もシミュレーションはできないので。今知事から指摘があったように、ここの内湾にしてはいずれにしても、いわゆる魚町、南町、港町部分は災害危険区域を逃れることはできない。何mでも逃れられない。一方で、決まっていないので災害危険区域をかけていないという状態にある。災害危険区域をかけていないと、案内の通り、任意で移転した人ががけ地近接等危険住宅移転事業の利子補給が受けられない状況になっているが、そのことについては当市の方で市のお金を使っても補給はさせていただく。それと、災害危険区域はかかっているが、防災集団移転に参加することはできる。すでに誘導型防災集団移転で何人か仮の申し込みして当選されて決まっている。他の地域の防災集団移転に参加している方もいる。また誘導型の防災集団移転に関しては、再募集をかけていくのでそういうチャンスも残している。それで、いずれにしても私たちが内湾にここまでこだわってきたというのは、気仙沼市の顔だからということが念頭にある。今回のことを踏まえて、これまで以上に、魅力のある空間を作っていかなければいけないと思っ

ている。当市としては、ここまで県の方に来ていただいたので、この点を踏まえて、まちづくり協議会の皆様と話し合っ、まずそのシミュレーションをかけて高さをいくらでも下げるとい可能性を請求していきたい。今日もこの後に色々相談をしていきたい。防潮堤ができて町が全体として賑わわないと意味がないので、南町も港町の皆様も各部会話し合いをしてもらい、当市としてのできる範囲で公共施設等をここに作れないかと温存しているものもあるので、その配置を含めて相談していきたい。いずれにしても、当市としては、他の浜もあるので、県も立場があると思うが、我々も基本的な考え方を守った上で、しかしここはこういう解釈ができた、合わせて安全もこういう形で守りましたというケースを作っていきたい。いっそう皆様との話を進めていききたい。

知事：まちづくりと防潮堤は一体だということ。一緒に考えていかなければいけない。防潮堤を先に解決してからまちづくり、ではなく、まちづくりと防潮堤と一緒に、気仙沼市と県と皆様が同じテーブルに着くというのが非常に重要だと思う。私が先ほど提案したのは一つのたたき台、非常に大きなたたき台だと思ってもらって良いが、堤防の位置もどこが良いのかといったことについては色々話し合いをしていかなければいけない。もちろんそこに仕事をされている方もいるので、その中の会社が防潮堤の外に出るのが嫌だとなれば中に入ってもらうようにしていかなければいけない。そういったことも、地元の人同士話し合ってもらうことが非常に重要である。これで大体シミュレーションをかけてほしいというのであれば、堤防高がどうなるのかというのを調べてみたいと思う。ただし、低くなるかもしれないが、高くなるかもしれない。これはやってみないとわからない。今から結論を出す事はできない。

### 3. 内容 (2) 意見交換

菅原昭彦：知事へ向けてになるが、先ほど話した下げることが前提ではないにしても、今までの知事が高さを変えないということについては、L1の基準は変えない、L1は守るが、その中でシミュレーションをかけて高さが変わる可能性があるということか？状況が変わったことによって。そこを確認させてほしい。

村井知事：はい、そういうことです。高さを変えないという言い方が誤解を招いてしまっただが、基準を変えないということである。これはもう全県全部同じ基準でやっているの、内湾だけ特例ということには絶対にできない。逆に高くしてくれと言うならまた別だが、低くするというのは責任が持てないので、知事として責任が持てるということで定めた基準なので、国からずっと降りてきた基準であるので、これはもう変えられない。ただ、今

言ったように色々工夫することによって、高さが多少変わってくることは十分考えられるというふうに思う。

菅原昭彦：そこは、今までと大きな違いだったので我々は高さを変えない発言から色々な不信感も生まれ、こちらから言う条件も受け入れてもらえないという話になっていたので、そこは最初に確認をさせていただきます。

それと、もう一つこれは市長さんになるかもしれないが、例えば下がっていった場合の災害危険区域の関係というのはどういった風に考えているか？

菅原市長：災害危険区域に関しては、私たちは今防潮堤が決まってないので、災害危険区域の設定はしていないが、シミュレーションはももとの5.2でやった。大体のエリアは決まっていて、実は都市としては1m余裕高をとったのもやってはいた。当市として、やってみてそんなに変わらない状況だった。ただそれは、色々な前提があるので、県の方でも一度かけなおして頂く必要があるかと思う。その時に、今度、私たちのかけた時は港町を全部海岸に沿った合う形でかけていったので、状態が変わるので全く同じではないと思うが、勝手なことは言えないが、この間かけた感じとしては、極端に広がることは、そんな感じにはならないのではないかなと思う。そのように県のほうでやっても、港町側をなくしても、変わらないように期待をしたい。とても住めないところが増えるわけでもなく、とても住めるところが増えるというわけでもないということ。

坂本委員：知事が高さに関して、このような見解を示してくれたことに本当にありがたいという気持ちだが、高さというよりは、そこに今防潮堤の形態があるが、山付けにしたものと、お神明さんの先に湾口防波堤を一緒に併用するというシミュレーションをかけていただくことは可能か？

村井知事：可能かどうかも含めて、要は県が出した案をダメだからでは前に進まないで、そういう案も含めて、ぜひ皆様と一緒に知恵を出して頂きたい。今のところは、こういう場合に新たに防波堤を作っていない。もしここで、そういうことを認めるとなると、他の地域でどうなのかなど色々あり、我々としては経済効果等を検討して、話を進めていかなければならない。当然国との調整も必要となってくるので、それは色々皆様から意見を出して頂いて、我々としても当然議論した上で、またそれを持ち寄ってということになる。だが、今の段階でいいですとは言えないがそういうアイデアを出して頂くことは大いに結構だと思う。

坂本委員：それで高さが低くなった場合はそれで認めてくれるということか？

村井知事：それが一番ベストということになって、皆様がそれで良いということになれば、ただ、県も市も国もあるので、皆様と4者が合意しなければならないということである。また、当然だがそこで従事している、船で従事している方もいるので、その人たちの意見もしっかり聞かなければいけない。その辺は、皆様と気仙沼市がよく調整して頂かなければならない。検討しないといけない、門前払いということは無い。

鈴木委員：南町2区の鈴木です。先ほど山付けの案が出たが、これは市の方から提案を受けて県の方で検討して頂けるという一つの案だと思うが、そもそもここに山付けにした場合に防潮堤が低くなるということを期待しているが、市の方として市当局としてこれを提案する根拠というか、シミュレーションはされているのか？

菅原市長：港町を無堤化して、先ほど言ったように懐を広くして南町から柏崎の根本に山付けしたら下がるのではないかということに関しては、シミュレーションはしていない。あくまで期待。実際にそのどこにつけるかという問題はある。既存の建物もあるので。それがあるという前提でやるのか、補償というものができるかできないのかということもある。それは、山側にもあるし海側にもある。ただ、今回県の方が、港町の堤防の提案を具体的に受けた時に、非常に難しいと思った。なぜなら、岸壁の直後には建てられない。先月、岸壁の所から少しその現在の道路に岸壁側のラインを潰さないといけなくて、全体として港町側が細くなるような形しかできないということが示された。そのようなことを含めると、ここはこれまで通り無堤で行けばそれに越したことはなく、合わせてもしかしてシミュレーションで高さが変わることがあれば期待することを一度、絶対やってみたいとは思う。

鈴木委員：ありがとうございます。そうすると、そもそも全体的に低くなるということを想定してということではなかったのか？

菅原市長：それはわからない、あくまで県の方にずっとお願いをしていたのは、特殊計画堤防高というのは、この気仙沼の内湾、私たちはご存知のように、宮城県で一番静穏な湾だと思っており、震災当時のビデオを見ても、この中に水が入っている映像を売っている、TBSで。それを見ても、また、実際特殊堤防高がここは採用してもいいですよといっている女川湾の破壊の様子を見ても、そのことが無理なく検討して頂けると思ってお願いし続けている。今日の段階は、そういうことだけでなく、実際にシミュレーションをかけてみないと述べられない、検討できないというご返答なので、それはそれで今日の段階は仕方ないと思うが、私としては今だに、その分は何とかできるべきだと考えている。ですから、もっと横に繋がったからといって下がるということは期待に残念ながら尽きません。

村井知事：下がるかもしれないが、変わらないかもしれない、上がるかもしれない。それと、今内湾の事だけ見ている。ここに集中しているが、当然ここを工夫すればするほど周りに影響がある。周りはすでに色々な事業がスタートしているので、そこに説明に行って、またご理解を頂かなければいけない。多分この影響が少なくなるということは、堤防が少しでも低くなるということは、影響が小さくなるということでその分全体のエネルギーが変わっていないということは、その残ったエネルギーは周りに分散されてしまうということ。ですから、内湾だけを守ればいいということではなく、全体を見ながら俯瞰しながら見ていかなければならない。それで、皆様は内湾の事をやっているの、これがベストという案をどんどん出してもらってもいいと思うが、県の立場としては、このエリア全体を俯瞰しながらベストミックスを考えなければならぬ。ですから、皆様としても譲って頂くということは必ず出てくると思うので、ぜひその点をご理解いただきたい。自分たちだけというようにはいかない。いずれにせよ、県が出してくる案を待っているようでは話にならないので、今言ったように色々な案を出して頂きたい。同じテーブルについてほしい。今日はそのスタートをすること、再スタートをすることを決めて頂くとう有難い。

鈴木委員：いずれにしても、ということは、下がるか上がるかももちろん当然わからないことがあるかと思うが、一つの案として県の方でシミュレーションをかけて一つの案として取り上げて頂けるということではよろしいか？よろしくお願ひいたします。

菅原昭彦：知事、今までも同じテーブルについてきた訳ですから。今までついてなかったみたいな話なので。ただそれが、今までは一方通行でどっちかという説明やって文句言って終わりという話だったということですか？

村井知事：すみません。手を携えて前に進む。そのような表現に変えましょう。手を携えて。

斉藤委員：魚町1区の斉藤と申します。市長にちょっとお伺ひします。先ほどご挨拶の中でいみじくも言われた、堤防高を下げる努力をしながらも、盛り土かさ上げの幅を上げることも可能ではないかと、それについて早急に調べたいという言葉だった。今、どうも知事の説明からすれば、いわゆる5.2mといった高さはそうそう変わらないだろうと私は感じているが、であるなら、問題の落としどころとしては、圧迫感のないように、問題は地面から堤防高の高さなので、地面を上げてもいいわけなので、ただそれも、TP+1.8までのものが3.8まで上がるのか4.5まで上がるのか、それが現実的にどこまで可能なのか、これを早急に、どこに伺えばいいのかわからないが、市のほうで詰めて頂き、現実的にそうなった場合に、県の方でいまシミュレーションしている4.2あるいは5.2、地面でどれくらいの差がでるのか。それが圧迫感を持つのかどうなのか。その辺が現

実的に見えないと、TP+1.8から5.2ということであれば非常に圧迫感があるし、ちょっと嫌だと。心情的にも嫌だということになるが、そこを埋めていかないと、論議が前に行かないのではないかと思うので、ぜひ先ほど挨拶にあった盛り土の高さを早急にどこまで上げられるのかということ、検討して頂きたいと思う。

菅原市長：先ほど少し言ったように、南町の方は特にその浜見屋の下の方に家屋が連担していることがありますので、魚町のほうを工夫すると。段差的なものができた時にどのような排出ができるかといったこと。もう一つは、これは数字的が最初に図ったのと後から図ったもので違うのではっきりとしたことは言いづらいが、太田の入り口が最初図ったところ1.8しかなかった。それを踏まえて、どこまで上げられるかといったことは、非常に難しいことであるので、実際に今の高さを含めて、逆勾配といったものができるといったことがあるが、相当な排水が必要となってくると思う。そのことも含めて、ある程度検討を、私がこのようなことをいうと都市計画課に怒られるかもしれないが、5cm10cmといった感覚ではなくてできるのか、ただ、2mとかそういうのは無理だと思う。ある程度工夫したなってことをどこまでできるか。やらせてみたいと思っていた、それと、希望ばかり言って申し訳ないが、元々がシミュレーションで合わせ技ができないかというのが今の気持ち。それもまた、皆様にお持ちしてかつ、同時に、今までの議論ここだけではないが、パスが出たり模型が出たりというのを南町とウォーターフロントを含め、出していくことによって、イメージができて、これなら震災前と比べて、遜色ないといったようなことが見えていくような私たちのプレゼンを皆さんの前でしていきたい。ただ、いずれにしても魚町のラインに関しては、ここは絶対値というのではなく、相対値としてどこまでいけるかということかと思うので、努力をしてみたい。

白井賢志：今、同じテーブルにつくと県知事と我々市民と、これを今後どのように向けて行くかとお聞きしたい。

村井知事：私この後、議会事が今年中に2回ある。まだ、出馬表明は用意してはいないが、もしかしたら、何があるかわからない。ずっと12月までいっぱいいっぱいである。だから、こんなに頻繁に来れないので、事務方を通して、気仙沼市の専門家、事務方と、あと皆様方と定期的に関いて、課題を出して、いつまでにその課題を解決するかと。シミュレーションをかけるのは2週間くらいかかる。Aパターン、Bパターン、Cパターンこれでシミュレーションかけようとやっていると2週間かかってしまう。2週間止まってしまうので、それをだいたい月に1、2回くらいまですずっとやっていって、だんだん決まってくるとずっと回数を多くして詰めていく形になるかもしれない。

白井賢志：事務方の方なのだが、例えば気仙沼市に少し押されて、我々に押されて少し譲

歩し過ぎているといったことはないか？大丈夫か？

村井知事：そのような訳にはいかない。最終的には私が全ての責任を取るので、頻繁に報告は県庁で受ける。そんな無責任なことは言わないので、報告は受けるが、その都度私が指示を出して、必要な大きなところは、私が判断して、指示をして、また会議に臨んでいただくといった形になる。

臼井賢志：その辺なんですよ、決死のつもりで来られるのではないかと。もっと、本当に私どもの話をよく聞いて頂き、今日のこの案だけじゃなく、もっともっと色々あると思う。知事は忙しいし、時間が限られているので、そういう車座になって話すことはできない、でもしたい、本当はもっともっと。言っていることも全部わかる。それを踏まえたいうでもっと具体的に、親身に話し合いをしたい訳だが、失礼な言い方かもしれないが、事務方の方で大丈夫かなという思いである。

村井知事：私より詳しいプロフェッショナルな方々なので安心して頂いて良い。技術的なことは大丈夫。ただ、予算がかかるので、やっぱり大きな変更等あれば、それはもう私の方の支持を仰ぐといった形になる。

坂本委員：先ほど知事は、防潮堤とまちづくりを一緒にやっていかなければならないと言ってくれたが、今私たちの町の方でもグループ化補助金といったものがあり、商店街向けだということで、それにエントリーをしようと思っている。そういったこともあるので、ぜひスケジュールにあった期限というのを決めてやっていただくことをお願いなんですけども、その辺は県と市と私たちも当然参加します。そういう話し合いには乗ってくれるか？

村井知事：実は、私どもは非常に焦っていて、年内にはこういう形でやろうというような合意に至らないと、これは内湾だけの問題、気仙沼だけの問題といった訳ではなくて、宮城県全体に影響する。国に計画を出して許可をもらわなければならないので。ここで止まってしまうと全部止まってしまうので。物凄い心配をしている。ですから、年内にはきちりとしたこういった形でこういったまちづくりでといった形で、皆さんと合意できるようにしたいなど。なので、ずっと話し合いはこまめにやっていかなければいけないなど思っている。ただシミュレーションをするのは2週間くらい必要である。

坂本委員：それと、今日に関して話はないが、先ほど市長が今ここで答えなくて良いが、内湾地区に公共施設を温存してるという言い方をしたが、これはどうしても今日でなくて良いので後で教えてほしい。

菅原市長：部会の方には伝わっていると思うが、少し言葉を間違えた。温存しているという、他から持ってきたみたいな形になってしまう。そうではない。

高橋委員：本日はどうもありがとうございました。非常に前回とは違い、別々のテーブルについていたのが、やっと同じテーブルにつけたのかなと思えないでもない。その中で週1回あるいは月に1、2回どどん会議をやっていくことは非常に良いと思うが、できれば時間がないという話にお互いがなっているので、年末までの予定を立てて、県からは3日前くらいに会議がやりたいといった案内が来るので、そうではなくてもう予定を決めてできれば良いと思う。それと、国の方針でL1とL2の関係があって、L1が低くなってもL2が広がったら、またそれも悩ましい所であって市長はL2は多分広がらないだろうというような希望的な話をしているが、そのようなところもみんな理解した上で色々やっていきたいという風に思う。その中で、様々な工夫を一緒にする中で、さっき湾口防波堤にも出てきたが、いつも内湾だと内湾の地図が小さい。港町も先ほどの防潮堤ももっと市場の方まで広げていったらどうなんだと、シミュレーションに数千万だか数百万かかるかもしれないが、そのようなお金でも間に合わないくらいのお金が失われる可能性があるので、あんまり頻繁にはかけられないと思うが、十分に議論して湾口防波堤がそこではなくて大島の入り口からどこが本当に最適なんだと、もちろん漁業へのもちろん影響もあるので、地図を広げてみんなで協議をしたいと思う。

そしてもう一つだが、シミュレーション。これについて先ほど防潮堤を勉強する会から松島と気仙沼の違い、気仙沼は明治の津波を痕跡高ではなく、シミュレーション計算値となっている。多くのお年寄りから毎日言われるが、明治の津波は内湾は津波が来てないと。その証拠を今みんなで一生懸命探しているところだが、シミュレーションの正当性。気仙沼の湾は他の湾に来た津波と違い、100m沖合の波がここ気仙沼湾に入ってきて、ほかには倍ぐらいにせり上がるのだが、気仙沼は逆に沖合の波が低くなる湾である。これはもう今回の津波で測定されているが、そのようなこともきちんとシミュレーションに表れているのか。海底の地形はちゃんと入っているのか、流速が非常に遅くなっている湾である。これも今回の津波のときに測定されているが、そのようなこともきちんとシミュレーションに表れているのか。シミュレーションに全て防潮堤のL1の高さの根拠としてなっており、L2もそれに合わせて計算値が出てくるはずなので、できれば2週間くらいのシミュレーションにも立ち会いたいとそんなことを思うくらい正確に入れて頂きたい。そんなことも合わせて同じ方向を向いて同じテーブルで喧々諤々年末までこれに集中して僕もやりたいと思うので、ぜひよろしくお願ひします。感想とお願ひでした。

村井知事：私どももそのようなことを望んでいる。ただ、過去なかったから、低かったからというのは港も堅硬にしているだけに、それだけ地形が変わっていて、最新の地形を入れながら、もちろん歴史に学ぶことも必要だが、最新の地形を入れながらどうなのかと検

証してみたいと思っているので、昔はこうだったから今回はいらないのだと、はいわかりましたとは言えない、ということは理解いただきたい。とにかく色々なアイデアを出していただきたい。

畠山委員：先ほど臼井さんの方から、出てくる人に責任を持たせて討議の中に入ってくださいといった話だったが、私も全権委任大使でもないが、それくらいのことだったらある程度答えてもいいよといった権限を与えないと、最終的には知事に聞かなければならないという話し合いでは、なかなかみんな真剣にならない。だから、ぜひこれぐらいまでは答えてもいいと、命令して頂きたい。その中で、我々も市もみんなが真剣になって討議できると思う。知事がずっと来ていただければ良いが、そういう訳にはいかないということなので、必ずそういった形でどなたかがある程度携帯電話とか脇にもってこういった話があるがどうですかといった話くらいは、そこで決めていきたいのですが、よろしくお願ひします。

村井知事：当然、職員もプロで私は細かいことは言わない。そんな口やかましい男じゃないので、ただ全然ドラスチックな案が出てきた時には、職員も決断に困ると思うので、そういったことは私の方で。例えば、防波堤を作れと、大島の方にまで作れと言われたら莫大なお金がかかるので、はいわかりましたなんて答えたら首飛ばされますから。そんなことは恐ろしくて言えないと思う。従って当然ある程度は任せてこれは自分の判断ではといったものは持ち帰ってもらう。携帯電話が通じるかどうかはわからないが、なるべくそのようにしていきたいと思う。言っていることはよくわかる。伝書鳩のようなことはさせませんので。

菅原委員：ご返答ありがとうございます。ところが、気仙沼市で要望していた5.2を4.2と数字くらいはお土産として今日は持って来られたのかなと思っていたが、そうではなかったのがっかりしている。そうであれば、5.2mといったことであれば湾口に可動式防波堤を据え付けることが必要だと思うので、今やっている浮上式の防波堤の実験が途中なのだが、一方フラップゲート式防波堤というのは、もう完成して時期を待つといった状況まできているようである。これは、先日ご存知かと思い知事に質問したのですが分からないと、詳しくはわからないといった話で、それであれば改めてプレゼンテーションをして可能性はないのかといった事を追求して頂きたいと思うが、知事さんの考え方としては動くものはダメだと、目の黒いうちはといったことだったが、これには正直言ってそんなことはないだろうと思うので、必ず今の状態であれば受注の受けられることになってきていることもあるが、今自民党で国土の強靱化というようなことをうたっているようなので、気仙沼湾で復興予算を使ってこれをモデルケースとしてやれば、海岸地区一帯の採用できるものであれば、これが一つの指針になるのではと思いますが、これが国土強靱化と

いううたい文句の中にも可動式防波堤は入れていただければと思う。

村井知事：期待を裏切るようで申し訳ないですけど、浮上式は絶対に無理だと思う。可動式も現実的には難しいと思う。メンテナンスの費用が物凄くかかるということ、耐用年数が極めて短い。機械式の奴は。今は復興予算でできるが30年後、40年後もう一回作り変える時におそらくどこからもお金が出てこないと思う。

菅原委員：そのことも含めてプレゼンテーションの中で意見調整していけばいいと思う。メンテナンスについては、そう大きいものではないという風に聞こえるし、イニシャルコストもそう大きくないと聞いているので、一番の良いところは発注から工事期間が3年で済むということが今の時代に何よりも合ったものだと思う。

村井知事：フラップゲートに何かはまったら閉まらなくなると思う。

菅原委員：それは市長から指摘を受けて沖の方に作るというのは諦めた。内湾であつたらそのような危険性があつたとしてもそう大きな問題にはならないということで前に一度市長と話をした時に内湾ならできるのかなといったことを言っていた。ただ、ボタンの掛け違いというか我々がやった復興コンペで県の方があまり応募をやりたくないという話も聞いていたのでそのボタンの掛け違いがますます話を進めないようになっているのではないかと思っていた。

村井知事：お気持ちはよくわかります。私も門前払いというわけではなくて、フラップゲート式は検討していなかったが、浮上式はよく勉強した。機械的なものは、今は実験段階でこの地区で取り入れることに関しては責任のある立場からすると難しいという判断をしており、その点は導入しないということが前提で話し合いをして頂けると大変助かる。

菅原委員：結党の一つの材料がですね、国土強靱化といううたい文句の中で考えていくべき筋合いではではないかと私は思う。宮城県がそれを、トップを切ってやっていくことは何にも恥ずかしいことではないと思う。

菅原昭彦：これはおそらくまだ検討していないんですよね？技術的なことは県庁内で調査していますか？

井上室長：フラップタイプについては、極めて規模の小さいものが水中で行われていると、実証されていると聞いており、実際に知事からもあつたが、浮上式のような詳しいことはしていないので、知事からもあつたように機械的なものについては、浮上式と同様に規模

の大きなもので実証してきちんと動く。メンテナンスについても浮上式と同じように費用がかかると思っており、確実に作動するかについてももう少し様子を見るというか、実証結果を見ていくしかないかと思っている。

菅原昭彦：そこは、きちんと調べてもらった方がいいと思うのだが。期待をもつたないではなく。

村井知事：調べろと言われれば調べる。ただそうするとまたこっちが止まるのではないかと心配である。

臼井賢志：メンテナンスは前知事さんが言ったものの三分の一くらいではないか？

村井知事：浮上式で年間1千万くらい。耐用年数が25年から30年と聞いた。

宮井委員：鉄管の薬剤を塗ることで現状30年といわれているのが100年ぐらい行くのではないかと言っていた。腐食に関しては、

菅原昭彦：それが遅れるかどうかはまた違う視点だと思うので、基本的にはダメだということはわかったが、今日決める事ではないので。

村井知事：わかりました。勉強します。

藤田委員：今までも皆様の質問や村井知事の説明を聞いて、私なりに思うことを話したい。私は魚町の2区という目の前が海岸のところで、そこで今職住一体型の住居に住んでいる。今魚町2区復興委員会としては、被災から50回を過ぎた会議をしている。市や県や国など、紆余曲折あった説明を色々聞いてきて、迷いながらも自分達では曳家とか建物の解体を容認して、この町を、内湾をコンパクトシティとして作って、高台移転とか部落を二分するとか、そういうのでなくて、この町を素晴らしい町にしてとにかく観光立市気仙沼を作りたいということでそういう復興になってきている。コンクリートのL1の防潮堤はどうしても、東北大の今村教授やコーディネーターであった今西さんに聞くと、雨水側溝から入ってくる水は防げないとのこと。現時点での科学では防げないという説明があった。それをどのようにして防ぐのか、それを考えていただきたい。この湾内には2mを超す雨水側溝が一つ、それから1.8m、これも太田から来る雨水側溝がある。それから水道管の大きいようなものが全部で合計10個湾内に入ってきている。その防ぎようをどうするか、それをぜひ考えていただきたい。私は過去4回津波にあつてきているが、津波と言うものが雨水側溝から跳ね上がってきて、側溝のふたを跳ね上げて、マンホールのふたを跳

ね上げて、必ず襲ってきた水位まで内側が上がる。そうした場合に、これが引き波になって雨水側溝からまた戻っていく時に、土や泥やゴミを雨水側溝にはめてしまって、流れが止まってしまう。その時にL1の防潮堤があると、また災害になってしまう。復興災害の恐れが出てくる。それをぜひ考えていただきたい。その点で防潮堤を造るのが良いのかどうか私は現在迷っている。

井上室長：一つはフラップゲートというものがある。これを付けることは検討できる。あまりに大きな地域は地盤自体を上げるとか、防潮堤の内側で集めて強制回収、ポンプ車で回収など、それくらいの対策は可能かと思っている。

藤田委員：それを県の予算で作ってくれるのか？とにかくフラップゲートなるものは用を足さない。それは今村教授や今西さんが言ったことなので、今の科学ではとにかく雨水側溝を止める方法はないと言っている。それであるのであれば、未来型の防潮堤にしても良いのではないかと思う。そこまでまだフラップゲートなどとなってしまうのだが。とにかく、そういうことを考えないでL1の津波のためのコンクリートの防潮堤を造って、L1の災害が来た場合に、果たして私が言ったような災害が起きないだろうか。とにかく私の経験上から言うと心配で仕方ない。これは絶対に津波の水位まで内側も上がるということ。経験上から言うと多分そうであると思う。県で言うフラップゲートなどに依存してしまって、災害が起きた場合にどのようにするのか。返って、コンクリートの堤防がなかった方が良かったということになってしまった時に、この問題はよくよく考えなくてはいけない。

白井賢志：同じ意見であるが、防潮堤も山側も海面と同じ高さになるということ。元々、この内湾に対しての津波は、直角にエネルギーが内湾に押しよせてきた津波ではない。魚市場の方から真っ直ぐ鹿折方面に向かっていく津波である。今回の津波でも3階にいて津波の様子を常時見ていた人もここに何人もいる。柏崎とお神明さんの間の、いわば内湾の湾口、湾口ののところから中に大型船1隻、これは福洋丸という船であるが、湾口から中に入っていない。要するに、津波に押されて内湾まで中に入ってきていない。内湾で陸揚げしてしまった船は、たまたまもやいを繋いでいた船が、そのまま海面が上がって、そして潮が下がった時に道路にそのまま置き去りになったということ。これは宮城県北部鰹鮪漁業組合の前もそうであるし、私の家の前もそうである。そういう船だけで、一度も外から攻められていない。内湾の各家がやられたのは、木造の家で80年から建っていて、土台が石のような上に建っている木造の家が、たまたま鹿折の方に行った津波が引き波の時に、神明崎の裏側の国道の方を通過して、後ろから攻められた。そして、内湾に家が出ていったということで、一度も他のことで家が壊されたということは全くない。静かに海面が上がったということ。ここに防潮堤が出来た場合に、防潮堤の山側はどうするんだろうと藤田さんは聞いたのだと思う。

村井知事：過去にも色々と経験はあるだろうと思うが、今回は内湾の周りは全て防潮堤で囲んでいるので、間違いなく波の流れは変わると思う。そういったことを前提に、全体でエネルギーを吸収するという事で防潮堤を造っているということをも先にご理解いただきたい。今までこういう流れであったから、今度もこういう流れでくるというのではいけない。もちろん、色々なところから水は上がってくるかと思うが、一番は5mくらいの壁で押し寄せてくるエネルギーを減災するというのが、防潮堤の最大の役割である。直撃されるのと、水が徐々に上がってくるのでは、建物に対する被害の度合いは変わってくると思う。防潮堤が決して無駄になるということはない。水が抜けきれなくなるというような課題はあるかもしれないが、それについてはポンプを使うなど色々な方法を考えて、検討していかなくてはならない。少なくとも命を失う方は相当減るのではないかと私は思う。

井上室長：フラップゲートが信用できないという話もあったが、そうであれば遠隔操作で閉めるゲート、それも数が多いと大変なので、市の下水の計画にも関わるとは思うが、防潮堤の内側にある程度大きなものに何か集約して、ゲートにして閉めてしまう。そして逆流を防ぐという方法は考えられるかと思う。それも今後皆様の意見を聞いて、背後の排水計画含めて、計画をたてていく。

藤田委員：それは岸壁の下にある。それを見まわるとか、掃除するとかいう方法は考えていただきたいと思う。とにかく大変だと思う。気仙沼の三日町、八日町の方から来ている昔からの川が一番大きい側溝になっている。それが逆流するのは、川から逆流してくる津波のような状態で逆流してくる。それが、陣山、太田、入沢というところからみんな内湾に落ちている。それが高潮になると、海が側溝の水を防ぐので、溢れ出てくる。それで洪水になる。側溝に呑み込まれずに。もし、市長が言うように3mかさ上げをしてもらえるのであればその上から、逆坂の町、それが最初から私たちの理想であったが、そういうことで考えていただきたいと思う。

それから、海岸をTP+1.8mと考えたのは、誰だかわからないが、最初は1.2から1.5になって1.8になった。港町は1.44のところもある。どういうことでこれが決められているのか、疑問に思う。

菅原市長：1.8の決定については、平成23年の10月の会議の時に作った当市の復興計画の中にそのことが書かれている。これまで、最大の高潮であったのは平成18年の10月の6日、7日だった。市場前の振興センターのところからずっと水がひけないという、その高さにあっても十数cmではあるが、まずはクリアするように設定し基準を置こうということで1.8という数字が出た。詳しくは復興計画の29ページに書かれている。そのことを基本として、そこから排水勾配をとるのが普通の場合である。例えば鹿折も南気

仙沼も今盛り土しているが、これは1.8以上に盛っている。それはやがて少し低くなるだろうということを計算に入れてやっている。しかし、すでに南町の話も出たが、家屋が連担をしてそこを活用しないで全て移転というのはあり得ないという場所については、また摺り付けが出てくるところに関しては、調整をしながらやっている。TP1.8を金科玉条のように動かさないとなくなってしまうとまちづくりが実体的には出来なくなってしまう。そこは補完をしながら、ある程度柔軟性をもって摺り付けをしているという状況である。

菅原昭彦：今の話を、私も県に言えば良いのか市に言えば良いかわからないが、こういう防潮堤建設、コンクリートであろうが山であろうが、例えば窪地とか法面の欠落や隙間の問題。これは県の問題、これは市の問題、これは国の問題であるからという話になり、結局手つかずになってしまい、何も対策されないまま自前でやることになってしまう。お金の問題ではないが、そういうことも起きかねないと思う。そういうことも含めて、隙間になってしまうことも含めて、一緒に考えていくということをぜひお願いしたい。できるだけ、それを何とか公費でできるような、あるいはできるだけ負担の少ない形でなおかつ今言ったような問題が起きないように、考えていただきたい。これは、このことに限らず細かい点も含めこれからの協議のなかでもいっぱい出てくると思う。そんなフォローもぜひお願いしたい。

菅原市長：そこは市も県にぜひお願いしたい。一緒にやっていきたいと思っている。結局、どういう形にもものにしようとしても、引き波の時に上手に抜けるのかという問題が残ったり、もう一つ深刻な問題は防潮堤を造れば造るほど、陸閘ができてどうやって閉めるのかという問題も必ずある。今回県の方から聞いているのは、なるべく人手のかからないような操作をしたい。実は大変変な形になっているが、気仙沼市は、消防団の方は津波到着時間の10分前になったらもう帰って良いことになっている。そうやって自分の身の安全を守ってほしいとなっている。しかし、実際問題2時46分に地震が起きて3時に津波がくると言われて、みんな3時以降に閉めてもらってそれ以降に帰ってもらっている。そういうことも今回の防潮堤の陸閘の時には整合性をとらなかつたら消防団の方にもお願いはできない。もう一つ、ぜひ県と一緒にやっていきたいのは、色々な意味で見かけというものも非常に大事なので、そこにお金が結構かかるが、そこは一緒になって国に認めさせていくということをやっていないと、この高さのものを市内で受け入れていくためには、どうしても必要になってくるので、ぜひお願いしたい。

菅原昭彦：知事よろしいですか。

知事：はい。

鈴木委員：技術的なことを県の方に聞きたい。今回予定されている防潮堤は、L1、百数十年に1度の津波であれば守れると、今回のようなL2の津波は千年に1度か百年に1度かわからないが、減災して逃げてもらうというのが前提の造りになっている。そうすると前提として、百年とか数百年とかはきちんとあるというのが前提のように思えるが、コンクリートでそれくらいもつものは果たしてあるのか、それが例えば百年もつコンクリートがあるとして、千年間守るとすれば、百年ごとに今回造ったものを毎回毎回また造り直していくことが、果たしてこの少子化の日本で経済的に可能なのか。地元の方々が海辺と繋がっているのを切って、住んでいる方が少なくなるリスクまで背負って果たしてやるべきものなのか。

また、津波から守るというだけでなく、逃げるという防災の発想はできないだろうか。例えば、インドネシアのスマトラでアチェという22万人亡くなったところに、世界中から色々な支援があり、私も行ってきたが、日本はエスケープビルというものすごく立派で丈夫な、柱とフロアと階段があるような吹き抜けの4階建ての建物だが、普段は子ども達が遊んでいるのだが、そこに逃げれば少々のもは全く大丈夫である。それは日本政府として支援しているが、なぜ我々の地域は防潮堤でなくてはいけないのか。1回作って永遠に続くものなら良いが、天然石であればしばらくもつと思うが、百年ごとにきちんとメンテナンスをしていただけるのかも含めて、逃げるという防災の発想をもし持ってもらえるなら、根本も変わって迷惑をかけることにもなるかもしれないが、将来的にはランニングコストもかからない、一つの選択肢になるのではと思う。

井上室長：コンクリートの防潮堤も百年間放っておくわけではなく、毎年毎年見守りというメンテナンスをしていく。少しずつ補修していき、百年のものを百二十年にするなど、ストックマネジメントという考え方が土木では主流である。大きなお金をかけないようにマメに少しずつお金をかけていく。長持ちさせる。それで百年以上はもつことにはなるが、それが二百年三百年もつかというとは違うので、そうなると結局造り変えるという発想が出てくる。計画はしなくてはいけない。場面場面での維持管理をきちんとできる高さがL2ではなくてL1というのが非常に理想的な高さであるだろうということも一つL1の防潮堤の高さを決めた根拠になる。

逃げるという発想について、当然揺れたら逃げるというのが一番なので、津波避難計画をどちらの市町村もたてることになっており、地域防災計画も見直しをして、結局揺れてどれくらいの津波がくるかというのは誰にもわからないもので、まずは揺れたら逃げてもらうのが大事である。そのためには、避難路や、避難計画などのソフト対策含めた計画を今後議論していく。

鈴木委員：ありがとうございます。同じことを聞いて申し訳ないが、今回は復興予算ということで国も本気でお金をかけているが、直すというメンテナンスに関して、遠い将来の

話で申し訳ないのだが、これだけの規模のものを、宮城県だけではないので、果たしてその時点の日本の経済力で支えられるのか。そうであれば、今からきちんとメンテナンス、修復を含めた予算を、国も県も市もそれを積み立てていけるのか、それがないと結局百年経ったら、ボロボロの堤防が海岸沿いにぐるっとあって、昔津波があったから造ったんだけどもうボロボロになってしまっというところもありえる。百年は早い。意外と親子3代4代くらいでなってしまうので。そう遠くない話なので、もう少し予算も含めて、造るのであればきちんとそれを残せる裏付けまで考えていかないと、今の仕事として今造るのはわかるが、本当の意味での防災には少し足りないところがあるかなという疑問もある。

村井知事：防潮堤については国のお金であるとしても県の責任で管理している。これはしっかりと計画をたてていかないといけないと思っている。防潮堤に代表されているが、学校にしても橋にしても道路にしても、コンクリート、アスファルトを使っているところはみんな同じ。これは見ての通りボロボロのままほったらかしの道路や橋、建物がないようにきちんと計画をたててやっている。非常に今財政は厳しいので、相当程度長持ちさせるように工夫している。そこは県が管理している以上、責任をもってやりたいと思う。

鈴木委員：もう一つだけ。対岸のところの広いところで逃げるのは大変だが、すぐ5.0 m 走れば逃げられるとか、小さなエスケープビルを作ればある程度この中に収容できるとか、逃げる防災というのを観点に新たに入れていただければと思う。

菅原市長：今回の津波防災対策というのは基本的には逃げるということできている。私たちが避難道というのを重視して、国に話をしている。一定程度平らなところに関しては、道路を拡幅など計画が出来ているが、先のことについてはこれからの戦いなのかと思っている。逃げるというのは、一番大事なのは、津波がいつどのくらいくるのかというのが地震の直後になるべく早くわかってもらいたいということ。これも関係機関には、今回の教訓として何度も何度も話をしている。一つわかったのは、地震の方は逆に予知ができない。地震が起きた後の津波が、どのくらいの時間でどれくらいまで逃げられるのかということも含め、より正確な情報がきちんと確保されたものが出てくるというような科学の発達を促していきたい。先ほど、アチェの話の中で避難ビルの話があった。避難ビルは私たち最低限指定をしていかなければいけないと思っているが、避難ビルの危険性というのは、特にそのためだけに作ったというところはそのエンドとなっている。今回の津波でよく語られている釜石の鶴住居小学校であるが、その話は常に逃げるまた先があるというところに逃げていく、思ったところまでは逃げられるが、思った以上のものがきた時に行くところがあるというのが、逃げる時の一番のポイントなのだと思う。しかしながら時間がないので、ここより上に一旦逃げなくてはならないというところを避難ビルとして指定をしたい。そこに何らかの助成をすることが必要だと思っている。気仙沼の場合は南気

仙沼の地区についても鹿折の地区についても水産加工系の建物が計画されている。私たちも随分相談を受けている。そこが相当立派なものが高くできていくので、震災前も当市が宮城県で一番建物数が多かったが、それ以上の状況には設定できるのかと思う。また、ないところは別の工夫をしたり、市が何かを作ったりということが必要になってくる。基本は逃げるということ。一番怖いと思うのは、住宅政策としては逃げなくても良いところに住宅を作るように言っている。そうであっても、津波警報やましてや大津波警報では逃げてくださいということ徹底していくことが次の課題になってくる。

佐藤委員：今日は内湾ということだが、内湾以外のことでよろしいか。気仙沼には全国からたくさんの船が入ってきて、水揚げして、それで気仙沼が成り立っている。水産宮城の一角も気仙沼が担っている。この間の津波の時にはシーズンオフで非常に船が少なかった。それでもあれだけの船が被災した。通常の時はどうかといったら、おそらく3倍4倍の船が湾内に出たり入ったりしていると思うが、内湾もうまくいって防波堤が出来て、俺達どうなるのと聞かれた時に、どう答えたら良いのか。俺達というのは船の船主さん達。あるいは、出来てしまってこんなこと想定していなかったのかと言われるのも困る。出来る前に、俺達どうしたらいいんだと聞かれた時に、どう答えたら良いのか。自分のことだけ考えていけばそれで良いのか。市場というものを抱えている市なので、このことも考えてもらわないといけない。今日の話ではなく、後日ぜひアイデアや考えを作っていただきたい。

村井知事：今基本的には住んでいる方達と話し合っているが、この地域で生業とされている方達もいる。当然であるが、皆様が合意すればそれで全てよしということではなくて、そこで働いている方達の考えもよく聞いたうえで、働いている方達にも理解を得られるような努力はしていかなければならない。市場という非常に大きなファクターであるので、一緒に参画して色々と意見をいただければと思っている。特に船がどういう影響があるのかというのは、なかなか陸にいる我々はわからないものなので、船主の目線でこういう問題点があるという指摘をしてもらえると大変ありがたい。

菅原昭彦：内湾については大体質問が出た。全体的なところを含めて質問などいかがか。

藤田委員：防潮堤に関して、これは絶対にダメだと国の指針にもなっているが、集团的自衛権みたいに、法律を拡大解釈して何かうまい方法はないものか。高さなど防潮堤に関して。フラップゲートとかそんなことは言わないので。あまりにも芸がない。気仙沼としてはとにかく、防潮堤というのが内湾にあれば資産が目減りするので、何とか拡大解釈のような方法でならないものか。

村井知事：気仙沼市のお金で、皆様のお金でそれをやるのであればいかようにもそれはできるかと思う。国民の税金を使う以上は、しっかりとした根拠がないと、国民に対して説明がつかない。今増税をして、復興予算を使っているから、どうしてもきちんとしたルールというものが需要である。間もなく大きな津波がくると言われている地域も、みんなやりたいが、できない。それはなぜかという財源がないから。これも復興財源であるから、特別被害を受けたからということで、このお金は特別会計に入れて、特別会計として、我々しか使ってはいけないとされているからできる。それを我々が超法規的に勝手気ままにやり出したら、それは他の地域、西の方の人たちからするとそれは我慢できないとなってしまう。これは国としてもしっかりと説明がつくように、我々としても県民に対して説明がつくようにどうしてもしなければいけない。気持ちはよくわかる。皆様長年ここに住んでいて、一番誰よりも気仙沼を愛している、内湾を愛している方々なので、気持ちはよく分かるが、ある程度のルールは必要。そのルールの範囲内で、私の裁量でできることについてはするので、知恵は出していくので、皆様からもアイデアをいただければと思う。

菅原昭彦：納得しているかという納得していないことがほとんど。我々も調べていくと、どうしても県には県の考え方があって、県の権限もあって、与えられる予算もあって、法律の中であるが、その辺は我々も国に対してもきちんと話をしていきたいと思っている。わからないことは徹底して国に聞いていきたいと思う。その時に色々な情報を、県の持っている情報を我々に教えていただきたい。別に国をリークするなどの話ではなく、必要な情報があればどうぞお使いくださいということで提供してほしい。そうすると我々も国に対して物が言いやすいと思う。

村井知事：当然だと思っている。我々の持っている情報も決して隠しているわけではない。何でも言ってもらえれば出せるものはどんどん出していきたい。

畠山委員：先ほど坂本委員からお神明さんの先に、内湾防波堤を築いたらいかがですかという話があり、まだそれは検討していないということなので、内湾は現実として小さい船しか入ってきていない。以前は大型船が入ってきていたが。シミュレーションというのは大変お金がかかるということであったが、そこはそんなに広くはないが、何らかの影響が出てくるのであれば、魚町のことばかり言うようだが、下がる可能性もあるはず。少しそれについて検討してもらえないか。

村井知事：皆様から、今日ではなくて今後の勉強会の中で、そのような意見が出れば、我々は真摯に受け止めたいと思っている。それはしっかりと検討させていただく。

菅原市長：何がダメだ、何がダメだと考えるのではなく、選択肢としては今畠山さんが言ったように、300tの船を繋いでいる時代では残念ながらなくなってしまった。19tの船しかいなかったり、今年辺りはカツオ船を置いていく人もいない。漁港としての機能が変わった。それで良いのかどうかというのは皆様に議論していただかなくては行けないが、今のところフェリーポートが出入りしているということもある。そのことを含めて19tの船だと良いと言っても、交差することもあるのだと、漁港としてやっている形でもあるのだから、そこは尊重してできる方法があるはず。そういうものがあつた上で、さらに皆様が神明崎の後ろにコンクリートの海岸突堤があつて良いのだと、景観としてそれは認められるというようなことも含めて、皆様の総意であればシミュレーションをかける意味がある。その前には皆様に納得していただくことや、漁港としての機能を確認することは出てくるかと思う。しかし、残念ながら港としての機能は変わってしまったというのは、確かにそうであるかと思う。

岩手委員：全く恥ずかしい質問なのだが、この話し合いに来て、防潮堤のことを考えれば考えるほど、疑問になることがある。私とすれば防潮堤の高さというのは私の背よりちょっと高いくらいであつてほしい。それから、地震が横揺れで地盤が揺れた時、高い防潮堤が倒れたり沈んだりするのでは。岩手県の陸前高田には野球場があつて防潮堤があつたが、あれは津波がくる前に壊れたのか、津波が来てぶつかつて壊れたのか、どうなのか。そもそも防潮堤というのは、あの高さが地震で揺れて津波が来た段階ですでにダメになるというのであれば、意味がないのではと疑問に思う。被災後、テレビの中で見る津波の異常たるや、防潮堤の高さも全てもつていかれてしまうという実態を見ていて、防潮堤の計画の場合、実際津波にあつて壊れたのか、最初から揺れで低下した中でそういうのがあつたのかと分かりかねていたので聞いておきたい。

村井知事：私もそのような疑問をもつたことがある。まず防潮堤の高さ、これは今回は百数十年に1回くらいの津波の高さ、来るであろうというものを、きちんと科学的に計算をして出した高さ、それに1mの余裕高をとっている。その結果が5.2mという一番高いところとなっている。地盤沈下するのではということは、地盤沈下する可能性はある。地盤沈下して、温暖化になって、この間も新聞で、百年間で80cmも海が高くなると言っているので、地盤沈下すること、海面が段々と上がってくることを考えながら、余裕高を1mもつているということである。それから、波で壊れたか、地震で壊れたか、これは間違いなく津波で壊れた。防潮堤は非常に堅固に造っている。今度は、千年に1度と言われる津波で越波して、内側が抉り取られてしまったので、そういったことのないように工夫しながら、その辺はコンクリートでどんどん固めるのではなく、景観もよくするようなことをしながら、できるだけ見た目も良く粘り気のある、簡単に津波で抉られて倒れないような防潮堤を造ろうという思いがある。したがって、次のステップとして、この辺で

良いのではという合意ができれば、環境、景観に配慮したものをどうすれば良いかという議論に入っていきたいと思っている。適切に質問に答えているかわからないが。

高橋正樹：岩手さんより背の高さよりちょっと高いと出たが、私はどうしても腰か、我慢しても胸までで何とか防潮堤をおさえたいと思っている高橋でございます。

今、海面が上がる話を知事がしていたが、地盤沈下した75cm、これが何年とは言えないがいずれ戻ると大阪一大の原口先生が言っていたので、それで余裕高は下がるかなと思う。

L1を整備する時に、高さはみんなで納得するところまでいったとして、景観には十分に配慮するところも、お金の算段も含めてお願いしたい。それと、自然への負荷がどうしてもかかってしまうので、そんな贅沢はできないとは言わずに、国立公園の中なので、ただのコンクリートではなく魚が卵を産み付けることができるなど、見た目だけでなく自然にも負荷がなるべくかからない最新の技術を使って、検討していただきたい。

今日は内湾の話になっているが、気仙沼全てが大切な資産であると思っている。ぜひ、全地区でこのように前向きに一緒に汗をかいて同じテーブルに着いてということ、防潮堤を勉強する会としてもお願いしたい。

先ほど窪地の話をしていたが、海岸管理責任者が6つか7つあると思ったが、気仙沼市はもちろん一生懸命やと思うが、他の所との整合性やリーダーシップをぜひ県知事さんにとっていただき、みんなを机に座らせてきちんと考えるようにしていただきたい。防潮堤の隙間が空くと、海岸に防潮堤が出来たら窪地が出来てその土地利用ができないというバカらしい問題が出ているので、これはぜひ国に働きかけていただきたい。気仙沼だけでなく、色々な市町村など、気仙沼全地区でそんなことが行われるようにお願いしたい。

村井知事：景観に配慮し、自然への負荷を少なくするようにしながら、やっていきたい。もちろん復興予算の範囲内ということにはなるので、あれもこれもというのはできないが、国が認めてくれる範囲内でやれる限りのことはぜひやりたいと思う。気仙沼の他の地域でもまだ合意に至っていないところについては、しっかり下づめでということで努力はしていきたい。ここ内湾は全体に対してあまりにも影響が大きい地域であるので、住んでいる方も多いということで、私がやって来たが、優秀な職員もいるのでそれこそ任せられるものは任せながら、しっかりと話し合いを進めていきたいと思っている。結局防潮堤が出来て結果うまくいかなかったということにならないように、窪地の問題も含めて、それについては気仙沼市の意見も聞きながら、地元の意見を聞きながら、国とも調整をしていきたい。努力します。

安藤竜司：防潮堤を勉強する会の安藤です。先ほどから色々な話と意見が錯綜する中で、最初はエネルギー規模の話をしてもらったが、気仙沼湾全体を見ていただくと四方を山に

囲まれていて、水を流入させないというのが一番エネルギー規模を小さくすることではないか。結局色々なことを詰めていくと、最初は、浮上式はお金がかかるからいけない、フラップゲートも可動式のものはいけない、なぜならメンテナンスの費用がかかるからなど、色々な理由が出ているが、我々の漁業協同組合の組合長も言ったように、湾内には各全国の財産を預かっている。全国の財産を預かっていたり、内湾には養殖施設や色々なものがある中で、メンテナンス費用が問題であるとか言う前に、もっと全体的にお互いのことやメンテナンス費用であるとか、例えば交通事故であっても昔は交通戦争と言われるほど死亡者が多かった。でも今は技術もだんだんと進歩してきて、ルールが画一化されていく中で、今は交通事故の死亡者が減っていつている。ちょっとした間に予算がついたからと言って、バタバタとやっていって果たしてどうなのだろうかという疑問がある。先ほど出たが、下水道も時にはフラップゲート使え、でも湾口防波堤の波を入れないためのフラップゲートなダメであるなど、話を聞いていると矛盾が多いので、その辺りをもう少し、こっちはダメでこっちは良いという前に、もう少し色々なことをしっかり議論してもらいたい。

村井知事：一例としてメンテナンス費用ということは言ったが、メンテナンス費用がかかるからダメだと、それだけの理由ではない。今の技術に確信が持てない。それが最大の理由。今あくまでも他の地域でやっているのは実証実験、実験と言うのは上手くいくかどうかわからないからやっているのであって、上手くいかなかった時にはもう一度別のやり方を考える、その時にもう家が建ちあがっていたら手の捉えようがない。したがって、技術的に確立されていないものを県として、私が採用することは絶対にできない。

津波を防ぐフラップゲートというのと、下水管の中の逆流しないためのフラップゲートは、全然構造も規模も違う。下水管のフラップゲートというのは技術が確立されているので、そういったことを職員が紹介したということ。同じ言葉なので、かなり混同してしまったが、そういう意味である。色々なアイデア、フラップゲートについても研究はするが、ここで防潮堤を作らないことを前提にやっていいのかという議論をしだすと、おそらく年内の合意というのは難しくなってしまうので、それはそれでまた将来のこととして研究はするが、まず前提は変えずに、検討していただきたい。

安藤竜司：結局ちょっとした津波でも、養殖施設など何億という損失でやられてしまう。先ほど鈴木さんが言ったように、百年という単位は結構早くくる。その中で、コンクリートがそこまでもつのかもたないのか、それもメンテナンスしながらお金は多くかかってくる。ダムも同じである。ダムも作る時より、壊す時の方が3倍もお金がかかるなど、色々なことが作ってしまった後では取り返しのつかないことになる。もう少し、エネルギーを流入させないということで減災していくなど、それを考えていただきたい。

菅原市長：防潮堤を勉強する会で私が呼んでいただいた第10回の時の最後の質問の中に、

全国から船が気仙沼に来て、気仙沼というのは安心な港として栄えてきた、船のことはどう考えているかという質問があった。その後調べたら、係船中の船に対して何らかの防御を考えている研究者は多分一人だけであるが、いた。そういう方の論文も見てみたが、今回私たちが見たような内容にフィットするものではなかった。一方、全国的には港の船をどう逃がすかという研究は別の人たちが進めている。そういうことに関しては、私たちも研究を進めていってほしい立場にある。情報を提供したり、参画していくことは続けていかななくてはならないと思う。養殖施設に関しては、今回いかだ式であった養殖、カキの養殖の中で、何割かわからないが、はえなわ方式に変わったところもある。そういうような小さな努力を少しずつして、強い港、強い養殖施設というようなことをしていかななくてはならない。一方で安藤さんの話している、湾口防波堤等に関しては、釜石にもあり、大船渡にもあり、どちらも今回壊れたが、大船渡は再建するにあたりかなり議論があり、少し改造するという話もちらっと聞いている。根元を陸につけないなど、そういう話もあった。その中で議論があったのは、水質の問題。平均深度三十数メートルの大船渡において、そういうことがあった。例えばそういうことを気仙沼湾で研究するということになれば、環境面のアセスメントを何年やる必要があるのかという問題が実際出てくる。当然、養殖業者の皆様がどう考えるかということもある。景観という意味でも、入り口に作るというのは何らかの考えをもつ人がいるのではないかと思う。そういうことを総合して考えると、明日あさってにという話では難しい。将来的な、ということであれば否定することではない。今回においては、市民の皆様含めての我々の立場として、実際防潮堤ができないと私の家は不安だという人も多くおり、災害危険区域を設定されて、災害危険区域は外れたけど防潮堤はいつできるのかという質問も各地区で毎回受けている。そういう流れもあり、現実的な選択、しかしながら今まで皆様が話したような気仙沼の特に内湾が大事だと、維持していくと、難しい知恵出しをさらに続けていきたい。安藤さんより湾口の話はずっと聞いているので、それはそれで一つの考えではあると思うが、現状大変な時間もかかる。それを実現するのは難しい。もちろん討議の中では構わない、県や国の方に例えばということで、釜石の場合は国直轄であるが、今ということではなく長期的な検討として完全に否定するものではないと思う。

臼井壯太郎：内湾で臼福本店という会社を経営している臼井壯太郎と申します。前回の会議の内容も聞いていて、非常に憤りを感じていたところであったが、本日知事の方から色々な案を出してほしいと、そして手を携えてもらいたいという言葉をいただいたので、我々も我々のノウハウを使って、全国のプロの方々と、専門家から話を聞きながら、県と市と一体となって立派な案を出せるように私も全力で頑張っていくつもりである。一つ残念であったのが、今浮上式防潮堤の話も出ていたが、私は遠洋マグロ船、今日発言した中で漁船経営しているのは私だけだと思うが、私は、私の大切な船も、全国から来る船も、先ほど市長がお答えした質問は私がしたものであるが、全国からたくさん船が集まってきて、

自分にとっても沖にある大切な工場であり、非常に高額な財産である。また、乗組員も日本人だけでなく、外人も多く乗っており、そういう命を守るためにも私は、内湾全体を守る、景観を守るような、浮上式が正しいかどうかかわからないが、そういうものを何か案を出していただきたいと言ったが、それについても却下されたのは非常に残念であると思う。港町として、町を再生するというのは、気仙沼市の発展の歴史というものがある。漁業があつて、水産業があつてそしてこの町が発展してきた。そういう歴史を踏まえながら、商店街の復興だけでなく、町の復興、産業の復興、そういうことを考えてもらいながらみんなで案を出していきたいと思うので、ぜひその案に前向きに検討してもらいたい。

また、先日8月7日に、我々漁業者として初めて市と県と話し合いをもつ機会があつた。県の担当者の方も今日来ているが、その際、我々漁業者の人からも意見を聞いたと言っていた、市の方も漁業者から話を聞いたと、そして今の港を再建しているということであつたが、我々は一度も話を聞いていなかった。そのような会議の場にも呼ばれていない。呼ばれたのは気仙沼漁協であつて、漁協というのは水産加工業の人が主になっている、問屋さんが主になっている、岸壁を再生するにあたって我々漁業者の意見が一つも反映されていない状態で、今の岸壁の修復が行われている。これは先日も話させていただき、前向きに市も市の担当者の方もこれからは漁業者の人からもきちんと意見を聞くという言葉いただいた。県からも市に対して、きちんと意見を聞くようにと指示を与えていただいた。我々も世界一の港町、また漁師さん達が作業しやすい岸壁として直していくのも我々の責任だと思っている。そこも含めて、防潮堤も必要なのかもしれないが、作業が成り立つような港町でなければこの町の再生は絶対にありえない。そこらへんを考えてもらいたい。私もプロではないが、世界各国の港町、全国のたくさんの港町を見てきている。産業が成り立つ、観光業が成り立つ港に、私たちみんな夢を持っているので前向きに検討していただきたい。

村井知事：本日はありがとうございました。色々と意見をいただいたが、少なくとも3手で手を携えて、前に進んでいこうという皆様の気持ちが伝わってきた。それに感謝を申し上げたい。私から5つ、これだけは皆様をお願いしたいということを伝えたい。

1つ目は、色々なアイデアがあるが、復興予算の範囲内でできるものでないとダメである。これはいくらでもお金をかければどんなことでもできる。当然それには時間もお金もかかる。復興予算の中でできるものであること。

2つ目は、今年中に合意を目指して考えていく。次から次へと新しいアイデアを出していったら、その度に全部止まっていたら前に進まないで、積み上げていくということに協力いただきたい。

3つ目は、まちづくりと一体となって進めていくということ。防潮堤が解決すれば全てが終わりではなく、まちづくりと一緒に考えていかなければいけない。気仙沼市とも一緒にまちづくりについても色々な意見を出していただきたい。

4つ目は、これは内湾だけの問題で捉えているが、当然だが、色々いじくと全体に影響を及ぼす。また他の産業にも影響を及ぼす。県としては、今は内湾のことを話し合っているが、地形的な問題もあり、全体の影響というものを俯瞰しながら考慮していかなければならない。その点についても、説明させていただくので、その点については皆様も譲れるところは譲るということでお願いしたい。

5つ目は、これは全县一律同じルールでやっているの、先ほど超法規的にという話があったが、それはどうしてもできない。今のルールをできるだけ柔軟に対応しながら、考えていくということでぜひ宜しくお願いいたします。

L1の津波には耐える物を造るのだということで今回やっているの、この点についてはご理解いただきたい。今日はありがとうございました。

菅原昭彦：今知事の方から5つ話があった。私は、この前提になるのが、まずはL1というものを全力で下げる努力を双方がしていく、3者あるいは4者で、国も入るかもしれないが、そういう努力を約束していただくというのが大前提ではないかと思う。それが一番誠意として伝わってこないと言った5つの話と言うのはなかなかできないのではないかと。今日は冒頭から高さについてはそうだと話をされてしまったので、何となく拍子抜けなところもあるが、これは約束をお願いしたい。まずはL1の高さについての基準、限界まで下げるとのこと。もう一つは魅力ある港まちづくりというものと一緒に取り組んでいくということ、この2つを約束いただきたい。

村井知事：わかりました。

菅原市長：今の話に関連すると、この間私たちも県の当局とやりとりをして色々な説明を聞いている。私たち行政側としてみれば、言っていることはほぼ正しいと思えるという話であるが、しかしながら話したのは、いくら正しいことを言っても、現実合意をしなくてはならない、そちら側に座っていて正しいことを言って私たちが理解しても納得はしないということになってしまうので、できればこっち側に座って私たちの気持ちで考えていただけないかと、お願いをした。被害者加害者ではないのだが、イメージとしては残念ながら内湾の皆様にとってみれば防潮堤を建てられてしまうのだという感じが心情的にはあるのだと思う。なので、向かい側に座っているうちは納得しないので、同じ側に座って先ほど菅原委員長が言ったL1を下げるということと一緒に汗をかくということをお願いしたい。先ほど臼井さんが言ったのは、私たちは気仙沼湾にとってみれば苦い経験がある、例えばコの字岸壁、東側は100mしかない。しかし船は1隻58mくらいある。計画した時は2隻着くはずであったのに、作った時には2隻着かないといういびつな岸壁を作ったということがある。そういうことを今回できるだけ避けていきたい、実際行政的に言えば、災害復旧なので元通りにしかできませんよとなるかもしれないが、それであった

としても港の使い勝手というものを利用者の皆様と一緒に話をしてできるだけ良いものを作っていかないともったいないと思う。いつもここが細くて狭くて困っている悩みというのは皆様少しずつ持っている。そういうことを、聞く場所が全然なかった訳ではないと思うが、積極的なアプローチというものを、市も含めて行政側から必要だと思う。県の皆様にも話をして、今からどこまで間にあうかわからないが、そこは私も言っていることはわかるので、今の時代より次の時代に合った漁港にしていきたい。

菅原昭彦：内湾まちづくり協議会としても、とにかく上のデザインをこれから作っていき  
たいとも思う。まずは、県と市と協議会とで共有してスケジュールからしっかり作って  
かないといけない。早速やっついていかないと間に合わない。その辺はぜひお願いしたい。そ  
こでうまく合意までもっていければ良い。絶対に誠意だけは忘れないでほしい。  
本日はありがとうございました。

#### 4. 閉会

佐々木：長時間に渡り、気仙沼内湾地区の防潮堤整備に関する意見交換会を開催しました。以上をもちまして閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

以上